

教育センター通信

第 11 号 (通算 105 号)

令和 5 年 3 月 16 日

三条市教育委員会

教育センター発行

ほ
ど
火床の火の心を紡ぐ

小中一貫教育

トップページ



2月17日(金) 瑞穂学園
第3回職員研修会

オーダーメイド訪問を通して感じたこと

教育センター 指導主事 高橋 将也

令和4年度は市内各校から計150回を超えるオーダーメイド訪問の依頼をいただきました。いずれの訪問においても、日頃から先生方が真摯に実践を重ねてこられた様子が伝わり、頭の下がる思いがしました。改めて、三条市の教育への御理解と御協力をいただいていることにお礼を申し上げます。また、オーダーメイド訪問は授業を参観することはもちろんですが、協議会を通して、先生方とともによりよい授業の在り方を認識することができる有意義で貴重な時間となっています。

さて、授業参観の際、皆さんはどのような視点で臨まれているのでしょうか。このことについて、職員間であまり話し合うことがなかったという方がおられるかもしれません。この場で“べき論”を展開することはいたしません。新年度の開始に向けて一旦整理しておくのはいかがでしょうか。ちょっとした隙間時間に近くの先生に問い掛けると思わず話が広がるかもしれません。職員研修等に位置付けることで授業観をアップデートするチャンスにできるかもしれません。参考にしてください。

結びにお知らせさせていただきますが、皆様のおかげをもちまして「三条市 ICT 教育ポータルサイト」を更新することができました。各校の実践事例を紹介しています。多くの皆様に御覧いただき、実践に役立てていただけると幸甚に存じます。

※「三条市 ICT 教育ポータルサイト」QR コード

学校で使用しているクロームブックから閲覧ください!



令和4年度授業力向上実践研修を振り返って

三条市教育センター主催の研修講座「令和4年度授業力向上実践研修」では、教職経験年数2年目から5年目の教員を対象とした Step 1 研修を 34 人が、7年目から10年目の教員を対象とした Step 2 研修を 6 人が修了しました。

令和3年度から、年間の研修に紙面研修に加えオンライン研修を取り入れ、感染症対策と多忙化の解消を図っています。Step 1、Step 2 ともに5月のガイダンスと第2回学習会を紙面研修とし、第1回（6月）、第3回（8月）、第4回（11月）の学習会をオンライン研修で行いました。全体での学習会は2回、個別の学習会は例年通りの2回と限られた回数で行う中での研修でも、受講者一人一人に指導主事が付く形で、受講者自身が選んだ教科等で研究授業を行い、Step 1 受講者は授業づくり実践記録を、Step 2 受講者は教育研究論文を執筆しました。

この受講生の研修の成果である「授業づくり実践記録集」(Step 1)と「教育研究論文集」(Step 2)は、令和2年度から校務用全校共有フォルダの教育センターのフォルダに、PDF原稿を上掲する形に変更しています。今年度分は既に上掲してありますので、ぜひ御覧ください。

研修の終わりに当たって、「まとめのアンケート」を2月に実施しました。日々の業務を進めながらの研修は、時に苦しいこともあったかと思えます。しかし、受講者自身の頑張り各学校で受講者を支えてくださった学校体制との両輪があって、下記の表の数値につながったと確信しています。受講者の皆様の頑なりに拍手を送ります。そして、各学校で受講者を支えてくださった皆様に重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。

<まとめアンケートから>

| ※表中の数値は、 回答者の割合 (%) | この研修に参加して自己の授業力向上に役立ったと思いますか。 | | | |
|--------------------------|-------------------------------|-------------|----------------|-----------------|
| | 大いに 役立った | やや 役立った | あまり 役立たなかった | ほとんど 役立たなかった |
| Step 1 研修： 34 人修了 | 76.5 | 20.6 | 2.9 | 0 |
| Step 2 研修： 6 人修了 | 83.3 | 16.7 | 0 | 0 |

以下に、Step 1、Step 2 のそれぞれ受講生のアンケートのコメントの一部を紹介します。

| Step 1 受講者 | Step 2 受講者 |
|---|--|
| 研修を通して「三条市授業スタンダード」の重要性を再確認することができた。 | 全体研修会で受講者同士で意見交換をする場があり、刺激を受けた。有意義だった。 |
| 指導案作成、授業公開、実践記録作成において、校内でも様々な指導・助言をもらった。来年度は自分が支援する側にまわりたい。 | 初めて教育論文を書くことに不安があったが、学習会資料に論文完成までの道筋がスモールステップで提示されていて、取り組みやすかった。 |
| 研修の見通しがもてるように学習会資料に示してあったが、紙面研修とオンライン研修では、自分の読み込みが足りなかった。 | 個別に指導してもらう機会が貴重だった。授業だけでなく、学級のことでも日頃悩んでいることの相談にのってもらってよかった。 |

来年度も「授業力向上実践研修」を実施しますので、対象の経験年数の教員の皆様からの積極的な受講申込をお願いします。

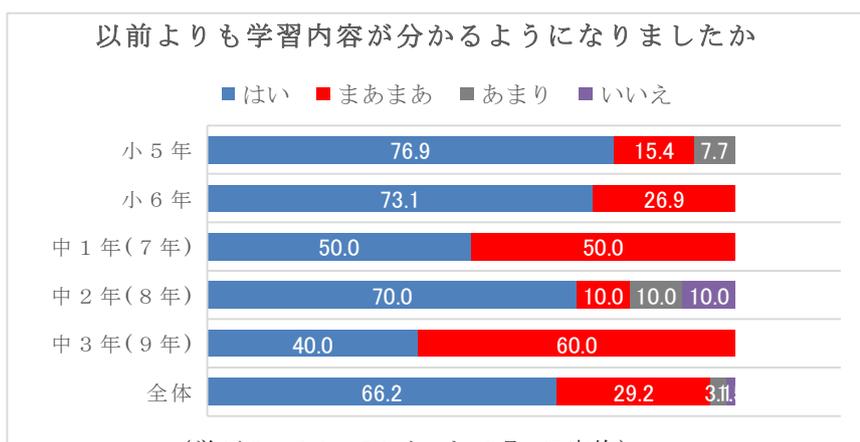
さんじょう学びのマルシェ

今年で9年目を迎えた「さんじょう学びのマルシェ」は、「もっと学びたい」と希望する子どもたちが、自分に適した教室を選び、土曜日の午前中に市内六つの会場で自主的に学習をする取組です。

「さんじょう学びのマルシェ」では、日頃の学習を個別に学び直すコース、発展的な内容の学習を行うコースを開設し、教員OBをはじめとした指導員（市民ボランティア）の皆さんが、子どもたちの質問に答え、分かる楽しさを実感し、自ら学びに向かう姿勢を身に付けるための支援を行っています。

受講生や保護者の皆さんからは、「忘れていたところを復習できてよかったです。（小6）」「勉強時間が増えたからすごくよかったです（中2）」「先生方が、質問したことの答えに加えワンポイントアドバイスをくださったたり、自学自習のコツ等を教えてくださったりしてうれしかった。（中3）」「分からないところを聞ける場所があって喜んでいきます。（中2保護者）」等の喜びの声が多く聞かれました。

受講者を対象に実施したアンケートで学習の理解度を尋ねた「以前よりも学習内容が分かるようになりましたか。」という項目では、肯定的評価が、全体で95.4%となっています。その中でも小6、中1、中3では100%の人が肯定的評価をしており受講者の充実度が伺えます。



(学びのマルシェアンケート 2月4日実施)

アンケートの自由記述にも、「学びのマルシェに行ってから、分からないところも分かりやすく教えてくれたので、たくさん学習を進められたり、学校の授業で分かるところが増えてきました。（小5）」「算数の苦手なところが分かるようになってよかったです。（小6）」「英語の文法が分かるようになった。基礎的な部分が分かった。（中2）」

「分からないところが分かるようになった。（中3）」など、学びのマルシェに参加するようになって、学習理解が進んだことを示す声がたくさんあります。

今後も、受講生が学習に対して自信をもち「できた、分かった」という姿が増えるように寄り添いながら指導を進めて参ります。

今年度は昨年度より受講生が減りました。新年度の御案内の際にはぜひ一声かけて案内文書を配布していただくとありがたいです。



「三条市授業スタンダード」の活用・応用に向けて

～「三条市授業スタンダード」総編集版（令和5年）の巻末言をもとに～

「授業スタンダード」は、いわゆる“授業づくりの手引き”として、多くの県及び市区町村で考えられ活用されてきています。「三条市授業スタンダード」もその一つです。三条市教育委員会が示す五つの要素（「スタート・ラーニング」「学習問題◎」「対話（特に解決活動）」「まとめ」「振り返り」）は、学習指導要領及び様々な授業実践や教育学の知見を基に考えたものです。例えば、「スタート・ラーニング」の背景には「既知の情報と関連付けて理解を促すために予め提示する事柄（オズベル）」「授業開始のベルと同時に主体的に取り組む学習（石川県かほく市）」などが、「学習問題◎」をつくるための視点には「ずれによる創造（上田薫）」「模倣すべきモデルとの出合い（モース）」などが、「対話」の背景には「他者との関わりを通じての発達（ヴィゴツキー）」などがあります。自らの興味や課題に応じて原典や関連文献等に当たると、自身の授業研究を深められるかもしれません。

「三条市授業スタンダード」は、“子どもの問題意識（学習問題◎）”を中核として、日常行う授業のために考えられた“問題解決型授業”の一つの枠組です。今後も、各学校・各学園で、子どもの実態を踏まえ、「三条市授業スタンダード」を各教科等で大切にされている活動と照らし合わせながら、授業展開の仕方を柔軟に考え工夫していただきたいと思います。

日本には、芸事の文化が発展・進化してきた創造過程の基となっている思想に「守破離」があります。「守」とは、修業は、まずは教えを誠実に学び徹底的に実践するというように、型を「守る」ことから始まるということです。「破」とは、先のようにして修業・鍛錬を積みその型を身に付けた人は、かつて教わった型はもちろん他流派の型なども含め、それらと自分とを照らし合わせて研究し、自分に合ったよりよいと考えられる型を模索し試すことで、既存の型を「破る」ことができるようになるということです。

「離」とは、更に鍛錬・修業を重ね、かつて教わった型と自ら見いだした型の双方に精通しその上に立脚した人は、自分自身とその技についてよく理解しているため、既存の型に囚われることなく自在となることができる、つまり型から「離れる」ことができるようになるということです。

「三条市授業スタンダード」を日常的に活用して実践しつつ、子どもの実態や各教科ならではの活動等と照らし合わせながら「三条市授業スタンダード」を応用することは、「守」から「破」への道を探ることを意味します。「破」への道標については、「三条市授業スタンダード」総編集版（市内教職員との対話を基に改訂してきた第3版までの内容を総編集したもの）に加えて学校に提示しますので、今後の実践の参考にしてください。

なお、「守破離」は、千利休の「規矩作法 守り尽くして 破るとも 離るとても本を忘るな」（『利休道歌』）を引用したものとされています。「本を忘るな」とは、教えを破り離れたとしても、根源の精神を見失ってはならないということです。授業づくりにおける根源の精神とは、やはり“子どもの問題意識”つまり「学習問題◎」を中核とすること、ではないでしょうか。

